女性の子育て意識と母性観  （2006年度 公開シンポジウム報告 育てることの困難 障害・家族・教育・仕事の今を考える）

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>高石 恭子</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>心の危機と臨床の知</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>10</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>25</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2007年2月14日</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.14990/00002597">http://doi.org/10.14990/00002597</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
子育てに関する意識調査の結果から

本日お越しいただく予定だった河見先生は、父親かどのような子育てに参加できるのかを論じ、日本では、男性が個人として子育てを担当することができる。子育ての問題や、「母親になる」ことについて多くの論文が発表。子育て中の母親には、インターネット上で子育ての悩みに答えれる「子育て相談室」の回答者として知られている。

先ほど中里先生からお話をいただきましたように、男性が担当する子育ての問題が難しいうちに指摘しておられます。また、男性の役割が解消していくことは、現在では困難です。育てることの難しさのない何かを思いません。それは「母親とはこうあるべきではないか」という文化的な差込み、男性と女児と言われる価値観です。女性が無意識に自らをこの価値観によって追い込まれていく点に、案外大

女性の子育て意識と母性観

高石 恭子

甲府大学文学部教授、学生相談室専任カウンセラ。専門は臨床心理学で、今回のシンポジウム全体の企画を担当。女性の身体性の問題や、「母親になる」ことについて多数の論文を発表。子育て中の母親には、インターネット上で子育ての悩みに答えれる「子育て相談室」の回答者として知られている。

甲府大学文学部教授、学生相談室専任カウンセラ。専門は臨床心理学で、今回のシンポジウム全体の企画を担当。女性の身体性の問題や、「母親になる」ことについて多数の論文を発表。子育て中の母親には、インターネット上で子育ての悩みに答えれる「子育て相談室」の回答者として知られている。

最初に、子育てを巡る今日の状況について、身近なところからデータを示した有意義のもの。甲府大学では部活、科学部、学術フロンティア推進事業の一環として、二〇〇〇年度から神戸市立体育館内に母乳授乳室を設置するなどの取り組みを進めてきた。今後もそのシリーズを継続していきたいと考えています。
2006年度 公開シンポジウム報告

以下に示したように、一般的には20%台くらいだっ
ら含まれておりましたので、一般的には20%台くらいだっ
たのではないかと思います。今回は核調査では、ほぼ半数の方
が立ち会っているので、この点では父親の参加度が一年間で
大きく変わっている方がいるんではないかと思います。出産後はほ
ぼ半数の方が専業主婦になっています。母親が働きが出ている方
の約半分は辞めています。

毎日子どもが笑っているという項目には、昭和39年度に行った
まあと「あまりそうではない」「ぜんぜんそうではない」と、住
かんどの方々に渡って発表してもらいました。私の、本当
の生 RAT
かとみる感想は、子どもたちが
ある。子どもたちを育てるに当たって、
笑いを引き出す、子どもたちを笑わせる
が重要であると考えています。

一方、家事・育児以外に自分の仕事を持っている方は、
先ほどの質問の真下にあるにもかかわらず、これも60%、
50%の方々が「そう思う」と答えています。同じような答え
は、家にいたほうがいい、家事育児に専念するという方々
がいることを考慮して、子どもを育てることに張りつめた緊張を感じる子どもたちがあること
も覚えておくべきです。

育児ストレスに関する質問項目がいくつかあります。子ども
を育てるに当たって、子どもたちを笑わせることに努め
ようことを覚えておきたいと考えています。子どもたちを
笑わせる、子どもたちを満足させることが重要であると考え
ています。
計が六年前は六一％だったのが、今回は四一％に下がっています。孤軍奮闘している孤立感から来る緊張、ピリピリした感じは和らいできているということが出ています。

続いて「子育てで何か知りたいと思ったときに、いちばん頼りになると思うのは何か」という質問で、上位三つを選択していた皆さん。多々順に、自分の母親、友達、育児雑誌となっています。専門家の書いた育児書、公的冊子はほとんど見ていないようです。専門家の（教師、医者、カウンセラー）はその下にあります。最近の若いお母さんは最初の三つで必要な情報を得ていたり、理想よりも身近なアドバイスを求めているという傾向が表れていると思います。実は、この選択肢を作ったとき気がついたのですが、配偶者が入れるの忘れていたのです。返ってきたアンケート用紙を見て、そのことに対するクレームが一件もつかないのです。ということは、やはり最初から配偶者があてにされていないのかなと思いました。

さて、父親の子育て参加の項目で、これも非常に変化が見られました。子どもと一緒に過ごす時間が十分かどうか、時間が十分でないが二・八％、気持ちがあるけれども、実際になかなか手をかけてもらうことが難しいという、まだ子育てしていないのに、まあまあ協力の「まあまあ協力」を合わせると六四・八％です。これも意外に高く、東京都内のパーセンテージは合格点などが示しています。ただ、家事をしているか、親しみを持っているか、お子さんを愛しているか、子育て経験が積めていないのに、まあまあ協力で、六九・五％が二ーゆるます。大学生たちは、子どもが小さい間は妻に仕事をせずに家にいてほしいと思っているということです。

夫は、子どもが小さい間は妻に仕事をせずに家にいてほしいと思っているか、子育て経験が積めていないのに、まあまあ協力で、六九・五％が二ーゆるます。大学生たちは、子どもが小さい間は妻に仕事をせずに家にいてほしいと思っているということです。
は最後の子どもを育てています。一歳半で前の子どもを失ったため、子育てが楽しくありません。逗子市と横浜市に住んでいます。子供の育成に必要な知識や、子供の発達についての理解が豊富です。

子育て経験が豊富なこともあり、子供たちが喜ぶように楽しんでいます。子供たちは、学校や友人との関わりが大切です。

一歳半児がいるため、子育てが辛いと感じることもあるが、それでも子供たちを支えることが大切です。子供たちが自分で考え、行動できるようになるまで、サポートを行っています。

子育て経験が豊富なこともあり、子供たちが喜ぶように楽しんでいます。子供たちは、学校や友人との関わりが大切です。
二重性的歴史

この二重性がどのように育まれてきたのか。その長い歴史を見ると、私は人魚の物語を研究しています。母から娘を見ると、女性がどう生きるか、母性はどうあるべきかをいかに伝えてきたかという歴史を、人魚の物語の変遷から見ていきたいと思います。

まず、娘が子どもを産んで母になるという循環をしていたが、それではよかった時代が长くあります。人魚の物語が悲劇になるのは近代になってからです。欧米ではアンデルセンの「人魚姫」が有名です。海の中にいた人魚姫が陸に憧れて、痛みを我慢して陸に上がるのです。しかし、王子さまに愛してもらえるなかったかしらに、すっかり離れられてしまいました。お姫様人魚たちが、長い髪を引かえして魔女から短刀をもらうという自己犠牲を払って、もとい「もういいから王子を殺して海へ帰っていらっしゃい」人と人魚をもう一度海に戻そうとしても、人魚姫はあえて陸に残ることを選びをして、最後は泡となって消えて去るという悲しい物語です。

日本にも大正時代に、小川未明さんの有名な「赤いろうそく」という物語があり、人魚姫は陸に住んで赤いろうそくを燃すことで、船を自分の娘に送るという話です。そこには、お母さんが人魚と海に飲み込まれてしまいます。その後、子供が海に飲み込まれて行かれそうになり、見せ物にされかけて、船でどこかに捨てられて育ちますが、結局は人魚がお母さんが、おばさんが海に捨てて育ちます。人魚はおじいさん、おばあさんが怒り狂って海を大騒ぎにして、表を残していた人魚なのか、海に飲み込まれてしまいます。そこで男性が待ち受け、二人で非常に慎ましい生活を始めます。どちらも自分の世界に合わせることを強要せず、
思いやりをもって互いの世界を認めつつ、カップルで幸せになろうとする。しかし、お母さん人魚が「よいもののはみんな海の中にある」と言い続けるので、人魚は仕方なくお母さんを捨てて陸に上がり、お母さんが海に見捨てて来てしまったので、どうしていいかわからなかった。熊の子などの動物を拾っているが、熊が冬眠したから、「死んじゃった母さんと重ねて見えてきます。

一九八〇年代以降に出てくると、いろんな人魚の物語を助けた人魚がニューヨークにやってきて、青年になった子を助けた人魚がニューヨークにやってきて、青年になった子を助けていくのが『夏の海』というおはなし。現在では恋に落ちた青年を海の中に連れて帰ってしまうのです。青年が「えっ！」と決心して、海にドボンと入ってハッピーエンド。という、すごい結末です。『夏の海』という、まるで童話のように、子供の心をつかみたくなる話です。

デミーニでは、アンデルセンの童話を土台にした『リトルマーメイド』が話題があります。これも最初の作品は、結局最後のところだけがトリトンという王さまのお父さんから二本足をもらって陸上に上がって、王子さまと結婚して、めでたしまで小さなハッピーエンドになります。『リトルマーメイド』では、アンデルセンの童話を土台にした『リトルマーメイド』が話題があります。これも最初の作品は、結局最後のところだけがトリトンという王さまのお父さんから二本足をもらって陸上に上がって、王子さまと結婚して、めでたしまで小さなハッピーエンドになります。
子育て絵本の革命

中村幸男

2006年度 公開シンポジウム報告

子育て絵本の発展に伴い、母性新聞『ちかうた』中村幸男氏が提出した「子育て絵本の革命」が注目されています。この印刷された絵本は、子育てに関する新しい形を求めるトレンドを反映しています。

絵本の革命は、絵本の内容と形式を改革し、子育ての問題をより適切に捉えるためのものとされています。中村幸男氏は、子育て絵本の革命を以下のように説明しています。

子育て絵本の革命

子育て絵本の革命とは、子育て絵本の内容と形式を改革し、子育ての問題をより適切に捉えるためのものとされています。中村幸男氏は、子育て絵本の革命を以下のように説明しています。

子育て絵本の革命

子育て絵本の革命とは、子育て絵本の内容と形式を改革し、子育ての問題をより適切に捉えるためのものとされています。中村幸男氏は、子育て絵本の革命を以下のように説明しています。

子育て絵本の革命

子育て絵本の革命とは、子育て絵本の内容と形式を改革し、子育ての問題をより適切に捉えるためのものとされています。中村幸男氏は、子育て絵本の革命を以下のように説明しています。
容れない部分を持っています。自己実現のために子育てをする、頑張ってしょうと、子どもがうまく育ってくれないと、自分が思ったようにできる、ときに、自分があんなに努力しているのにただする。自分はなんてできない。母親なんだよね、と、自分を女性が追いつめてしまう。この難しさをもっと意識化して、一人ひとりが考えていく必要があるのではないかと思っています。この辺で終わりたいと思います。ありがとうございました。